

ライリア ヌール サフィトリ

インドネシア出身

東京外国語大学 総合国際学研究所 修士課程修了

2021年3月に修士課程を修了されたライリアさん。久しぶりに帰国したインドネシアは、大変なコロナ禍となっていました。実際に目にされたその情勢と感じたことを、ありのままに書き下ろしてくださいました。

インドネシアとパンデミック

今年3月、日本の大学院を卒業し、学部から博士前期課程までの7年間、長かった留学生の人生の幕を一旦閉じることにしました。私はインドネシアに帰国することに決心し、4月1日に飛行機に乗り、東京を後にしました。周りの人は「なんで日本に残らなかったの？もったいないし、日本のほうが安全じゃないか」とよく私に問いかけるようになったのですが、私もどう答えればよいのか時々わからなくなりました。しかし、このご時世で、なんとなくの予感で、結局実家に帰ることにしたのです。



実家近くの川の傍でご両親と一緒にライリアさん(右)

今思えば、その予感が多少当たったような気がしてきました。帰国2か月後に、イードという大事なお祭りの日が訪れました。イスラム教徒が約8割を占めているインドネシアでは、毎年一か月間断食を終え、家族や知人などで盛大に祝う日でした。私も7年の間、一度もこの日を家族と過ごすことができな

かったので、祖父母の家で家族と一緒に祝いしました。しかし残念ながら、幸福な日のはずだったこのイードは、インドネシアにとって、悪夢の始まりのようでした。

このイードが一つの大きなきっかけとなり、その後、コロナ感染者が爆発的に増加してしまいました。きっと政府も、国民も、多少は想像したことでしょう。パンデミックが一年間も過ぎ、人々はいつも「Sudah biasa!」(もう慣れた！)と口を揃えて言います。しかし、ここまで状態が悪化するとは誰も思っていなかったみたいです。7月時点で、インドネシアは世界一感染者が多い国となり、一日5万人の感染者数が記録され、毎日平均1,000人から2,000人の人が亡くなりました。

7月中旬、一言で表すとインドネシアはカオスでした。PPKM という、日本でいうと緊急事態宣言のようなものが発令され、一般道路が塞がれ、店もショッピングモールも販売中止となりました。外出もできず、外で聞こえるのは救急車のサイレンでした。病院がコロナ患者にあふれ、そして耐えきれず、結局患者を対応できないところも少なくなかったです。

その中で、民間の間では、デマが広がりました。病院に行けば、コロナ状態にされてしまうから、病院には行かないようにという馬鹿げたデマが特に増えてきたのです。結局コロナにかかった人が何日も病院に行かず、そのまま亡くなってしまいうケースも周りにたくさん起こっています。私の親戚の叔父もその一人でした。一週間ほどコロナ症状を抱え、結局この世を去っていきました。その1週間後も、田舎にいる

祖父も同じ理由で亡くなり、私の家族は毎日苦痛な日々を過ごしていました。

9月中旬の現在、ありとあらゆる手段で、インドネシアの状況が少しずつ回復に向かっていますが、母はいつも私にこう言います。「インドネシアにとって、コロナはお金持ちの病気だ」と。一部のインドネシア人にとっては、コロナという物自体がどのような病気なのか、正直あまり理解していません。外国からきた病気、その情報も、マスクも、酸素ガスも、薬も、お金持ちにしかわからないと思う人もたくさんいるでしょう。このカオスな事態の中で一番はっきり見えているのは、この国の貧富の格差、そしてコロナに対しての人々の油断が及ぼす結果でした。この悪夢のような嵐が世界中から早く去っていきますように。

以上